
王と呼ばれる者

如月 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王と呼ばれる者

【Nコード】

N0558BA

【作者名】

如月 充

【あらすじ】

一般人は存在さえも知らない悪魔。悪魔は、存在しており人の命を奪う。その悪魔から一般人を守るため、悪魔を倒すため悪魔祓いエクソシストと呼ばれる人たちがいる。

その一人である姫咲華蓮は、組織の人間から連絡を受け仲間が悪魔に堕ちたと連絡を受ける。そいつは日本に向かったため、華蓮もこれを討伐するため日本へと向かった。

その頃、高校生が遺体で発見されるという事件が起こっており白神

魁斗はそれをニュースで知る。昨日みたニュースでは報道されていた内容に、連続殺人？ と思いつながらもあまり気にかけていつもの日々を送ろうとしていた……。

※この物語に登場する、実在もしくは歴史上の人物・団体・国家その他固有名称特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係ありません

第1話（前書き）

すみません、以前同じタイトルで投稿していましたが操作をミスしてしまい削除してしまいました。

以前、読まれた方にはご迷惑をお掛けしてしまい申し訳御座いません。

第1話

街で、一番高いビル。そこに、ワイシャツとジーンズを着た背の高い女性が一人屋上に立っていた。女性は、鎖骨から肩にかかるぐらいの黒髪でビルに吹き付けられる風で、なびいていた。そして、胸元はワイシャツに押し付けられる窮屈さを紛らわすため、ボタンが外され、大きな胸を強調している。

女性は、ある任務のために誰もいない時間帯を見計らいやって来ていたがその任務も終わり、今は景色を眺めていた。

屋上から見える景色は、ネオン色に彩られその街が昼夜関係なしに活動している事が分かる。

しかし女性は、そんな景色を見ながらこの街の人間はのんびりだなと感じてしまっていた。だが、それも仕方のない事だと矛盾した気持ちも持っていた。

人は自ら危険と認識している事しか注意を払わない。だから、人は車の通る場所では車を、火がある場所では火を、階段ではゆっくりと昇り降りしたりなどには注意を払う。

だから、一般人が知るはずのない悪魔^{デビル}の存在に注意を払う事がないというのかもしれない事だと理解している。

ならば、注意を払えるように存在を明かせば良いと女性は一度組織の上の者に進言した事があった。だが、残念ながら進言が受け入れられる事はなかった。

もし、悪魔の存在を国を通して明かしたとしても大半の人間はその存在を信じずに、ただ馬鹿と言って笑い流すだけだろう。そして運良く、悪魔の存在を信じたとする。信じた人間は極端な話、家に引き籠もるだろう。引き籠もる事がなかったとしても、疑心暗鬼になっってしまう人は自分以外の人間は悪魔だと思ってしまう活動を阻害してしまう。

そんな中、経済が成り立つか？ 成り立つわけがない。経済が成り

立なければ、その国は滅んだものと言って良い。

だから、悪魔の存在は一般人には隠し続けなければならない。だから、私たち悪魔祓いエクソシストは悪魔が存在する限り気づかれない様に倒し続けなければならぬのだ。

それを聞いた女性は、確かにその通りかも知れないと思って浅はかな考えでそんな考えを提案した事を恥じた事を思い出していた。

そんな過去の事を思い出していると、女性がジーンズの左前ポケットに入れていた携帯電話が着信を報せていた。

慌てることなく、ポケットから携帯電話を取り出し電話に出ると左耳に当てる。

「姫咲華蓮、私だ」

華蓮が、電話に出た相手は華蓮が悪魔祓いエクソシストとして所属している組織

『審判の宿命』——Judgment Of Fateの頭文字を

取ってJOFと呼ぶ事が多い——で、世界各地で活動する悪魔祓い達と連絡を取る通信官の一人確か、チャップと呼ばれている男だったはずだ。

もう任務なのねとゆっくりと休める事など半ば諦めている。休みが貰えたとしても半日ぐらいのが年に4回から6回だ。

だけど、休みなど要求できる訳がない。こうしている今も人々の命が奪われているかも知れないのだ。そう分かっているにも休みの事を考えてしまうのは、人間なんだから仕方ないじゃない。

「シンガポールで任務に当たっていた、阪井将人が堕ちた」

「……！」

華蓮は、阪井将人がどんな人間だったのかは会った事がないのかは知らない。華蓮だって、悪魔祓いエクソシストとして活動している以上自分が悪魔に堕ちる恐怖はいつも存在しているし、覚悟も出来ている。

自分の事は覚悟していたとしても、他の人になると別になる。やはり、仲間が堕ちたと聞くと悲しんでしまう。更に、堕ちた仲間は殺さなければならぬ。殺さなければ、一般人の被害が通常よりも増えてしまう。堕ちたといっても化け物のような姿に変わっているわけではなく、姿は人のままなのだ。そして、殺し以外は人らしい行動を取る。

つまり、チャップが華蓮に電話を掛けて来て阪井将人が堕ちたという話をしたという事は、華蓮に阪井将人の姿をした悪魔の排除を命じようとしていると予想する。

「姫咲華蓮、貴様に新たな任務だ。日本へ向かった阪井将人の皮を被った悪魔を排除しろ！」

チャップは、そこまで言い終えると通信を切った。華蓮の持つ携帯電話から通話が切れたプープーという音が聞こえてくる。そのまま、華蓮は携帯電話をジーンズの左前ポケットへと入れ直すと今度は、右前ポケットから赤く光る宝石のような物体を取り出しそれを、悲しげな表情で見つめる。

悪魔に堕ちた仲間を殺した事は何度もある。だけど、それは仕方のない事だと諦める事が華蓮にはいつも出来なかった。害有る者に変われば、JOFからは排除の命令が下される。そのみだ。追悼式などが行われる事はない。

華蓮は、赤く光る宝石のような物体から視線を外し後ろを振り返る。振り返った先には、パイプが折れ曲がっていたり途中で切断されていたり、壁が崩れていたり大変な状態だった。そして、華蓮が見つめる先には人の骨があった。

その骨の正体は、阪井将人と同じように悪魔に堕ちた元仲間だった。華蓮は、その骨を見ながら自己満足だと気づきながらも声を出す。

「貴方が、頑張っていた事を私は忘れない……だから、安らかに眠っててください」

華蓮は、そう言うその後ろへ振り向き走り出す。そして、塀を飛び越え空へと躍り出る。

空へと躍り出た華蓮は、重力に引かれ真っ逆さまに落ちていく。だけど、華蓮は慌てることなく、自分の中に眠る存在に声を送る。

『ヴェル、行きましょ!』

『分かった、カレン』

華蓮は自分の中に眠る存在、悪魔のヴェルザーヌの返事が聞こえると同時に今まで重力に逆らうことなく落ちていた華蓮の体が空中で静止する。

華蓮の背中には、今まで生えていなかった黒い翼が左右に1枚ずつ生えていた。華蓮は、そのまま移動を開始し日本がある南へと飛び向かい始めた。

☆ ☆ ☆

「昨夜未明、兵庫県加古川市で高校生と見られる遺体が発見されました。遺体は――」

母が作ってくれた朝ごはん、食パンにハムエッグを食べながらニュースを見ていると、白神魁斗しらがかいと――髪は男性にしては、長く後ろ髪は肩に届くか届かないか、前髪は目に届くほどの長さ。見る角度によつては茶髪に見える黒――はまたかと思ってしまった。確か、昨日のニュースでも高校生の遺体が発見されたとニュースで報道されていた気がする。

何で、こんなに簡単にまるで息をするかの様に人を殺せるのか魁斗

には信じられない気持ちだった。人が人を殺して良いなんて道理はない。背負う覚悟はあるのか？と良くテレビの台詞で聞くけど、あったら殺して良いのか？と問い質したくなる。

魁斗は、そんな答えなど判り切っている事柄を考えながらも用意された食事を食べ終える。食べ終え、手を合わせごちそうさまと言うと下に置いてあった教科書などが入ったカバンを持ち椅子から立ち上がる。

魁斗は立ち上がると、食器をそのままテーブルに置いたまま玄関に向かう。玄関に着き、学校指定の革靴を履いているとリビングの方から情けない声で魁斗を呼んでいるのに気が付いた。

「後5分待ってよぉ、兄さん！」

そんな事を言ってくるのは、妹の由香里だった。朝の苦手な妹は、いつもギリギリになって起きてくる。俺や母さんが、もう少し早く起きるの頑張れと言っているが、悉く無駄にされていた。

だから何で、俺が遅いあいつに合わせななんのだと思ひ魁斗は妹に、待たん！と言ひ玄関の扉に手を掛ける。

「いってきまゝす！」

魁斗は、そう言ひ玄関の扉を開けて学校へと向かいだす。その後ろから妹の、薄情者ゝ！という声が聞こえてきたが遅い奴に合わせる義理はないと切り捨てた。

第1話（後書き）

更新は、早くを目指しますが不定期となりますのでご了承ください

※感想お待ちしております。そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などとして頂けると作者の励みとなりますのでよろしく願いいたします。

第2話

「兄さん、待っててくれてもいいじゃん！」

先に家を出て、学校へ向かう通学路を歩いていると後ろから走ってきた妹が息を整えながら第一声にそう抗議してくる。

その抗議の声を聞き魁斗は、妹の方に顔を向ける。妹は、走ってきた影響で耳下ぐらいまで伸ばした黒髪が乱れている。

その乱れた妹の髪を魁斗は、走る必要があるならもう少し早く起きれば良いのによ、と思いながらも手櫛で整えてやる。

「えへへ、ありがと兄さん！」

髪を整えていると、息を整え終わった妹が可愛らしい笑顔を見せながら魁斗にお礼を言ってくる。

何が嬉しいのやら、その笑顔を見ながら魁斗は首を傾げつつも止めていた歩みを再開させる。

妹も魁斗の隣を歩きながら、魁斗に一方的に話しかけてくる。内容は、学校であった出来事や友達と話して起こった面白い出来事など、取り留めのない話ばかりだった。魁斗も、そんな妹の話を聞くとともにしに聞きつつも返事の変わりに相槌を打ちながら一緒に登校するのだった。

妹の話を聞きながら登校していると漸く、校門が見えて来た。

封紋高等学校。その変わった名前と山の中に建てられている事。そしてやたらと広い敷地を持つ以外、特徴のない学校。そこが、魁斗と妹の由香里が通う学校だった。

その封紋高が建つ山の入り口であり校門を目指して歩いていると、目の前から手を振って歩いてくる男子学生と女子学生がいた。

魁斗と妹が先に校門に着いたので、その2人がやってくるのを待つ。

「カイ、おはよう」

「魁斗、由香里ちゃん、おっはー！」

魁斗は、そう挨拶してきた2人に妹と一緒に挨拶を返す。

少し眠たいのか今すぐに閉じそうな目を擦りながら、テンションの低い声で挨拶をかけて来る男子学生、柿^{かきわ}琶^{けいた}啓太。大柄な体躯、着崩した学ランに左手をズボンのポケットの中に入れ、カバンは左の脇に挟むかの様に持っている。そして、金髪に染めている髪をオールバックにしていた。

ちなみに、うちの学校は他人に迷惑を掛けなければ髪を染めていようが、耳に穴を開けていようが構わない。但し、迷惑を掛けた時の罰則はかなり厳しいものらしい。その内容は、残念ながら、「その時のお楽しみ！」と言われてしまって魁斗は知らない。殆どの学生が、その時の寒気を感じる程の笑顔で何かを悟ったのか他人に迷惑を掛けない程度に、真面目に過ごしている。

不良と間違われそうな外見だが、啓太は不良じゃない。授業は、真面目に聞いている所しか見たことないし、成績も結構上位に食い込んでいた。何で、そんな奴が不良と間違われそうな姿をしているんだと思った魁斗は、啓太に聞いてみた。すると、突然顔を青くし体を震わせながら、

「私の弟が、舐められちゃー困る！」

そう言った啓太の姉に無理矢理させられたと言っていた。そんな啓太に、嫌なら嫌とハッキリ言えば良いじゃんと思った魁斗がそう言うのと、啓太はあの姉に逆らえる訳ないだろ！と泣きそうな表情で叫んでいた。残念ながら、啓太の姉に会った事がない魁斗には、確かなと言えず困りながらもそうだなと、そう返事をするしかなか

った。

次に、朝から啓太と違ってテンションの高い女子学生、飯嶋いいじま静香しずか。平均的な体型で、名前の静は何処に行ったんだと言いたくなるほど、元気な女子だ。髪は、妹と同じぐらいの長さでわざとなのか後ろを跳ねさせている。

そんな彼女は、今も尚通り過ぎる同級生の女子から朝の挨拶を受けていて挨拶を返していた。元気な上に、何事も正直に言う裏表のない彼女は同級生問わず、同姓から慕われているようだ。妹の由香里も、静香の事が好きみたいで何やら相談事など色々としているようだった。

そんな2人と合流し、4人で校門を潜る。校門を潜るといつも何か神聖な気のようなモノが体の中に入り込んでくるような感覚に魁斗は陥る。その感覚に入学当初は、戸惑ったが校門直ぐ近くにあるモノの為かなと魁斗は思った。

それは校門を潜れば、直ぐに近くに存在していた。何の為にあるのか知らないが左右に一個ずつ祠が建てられており、生徒が近づけないようにバリケードが施されている。

入学当初の生徒は皆誰もが、その祠に気づくと足を止めて見つめていた。だが、もうすぐ1年が経とうとしているこの時期に、祠に足を止める者は殆ど居らず魁斗たち4人も他の生徒同様見慣れた風景の一部として祠を認識し、足を止める事もなく目の前にある校舎に続く階段を昇り始めた。

階段を昇りながら、4人は明日から始まる期末テストの事を話していた。魁斗、由香里そして啓太は授業や復習を一通りこなしている為、特に慌てる事もなくテストの事を意識していたが、勉強が苦手な静香は元気な姿はどこに行ったのか、うーうー唸りながら魁斗と啓太から分からない所の説明を受けていた。

「だから――」

魁斗が今説明していた所をもう一度、どうすれば静香が理解できる
だろ？ と考えながら説明しようと口を開きかけた時、階段が終わ
り目の前に校舎の入り口が見えた。

「んじゃ、続きは教室に着いたらな」

今度は、啓太が未だに唸っている静香にそう声を掛けると校舎の中
に入っていく。校舎の中に入るが、特に靴を履き替える必要がない
ため4人は教室に向かおうとする。4人の中で、唯一1年生の妹の
由香里だけ1階に教室があるためその場で、魁斗たちと別れる。

「それじゃ、兄さん。またね！」

そう言って、妹は教室のある方向へと向かって行った。そして、3
人となった魁斗たちは2年の教室がある2階へ続く階段を昇る。

3人は、クラスも同じのためそのまま2階に着いても別れる事無く
自分たちの教室へ向かう。

教室の前に着くと、魁斗が代表して扉を開く。教室へ入ると、明日
のテストを少しでも良くしようと教科書やノートを開き、あれやこ
れやと言いつ合っている者、余裕なのかそれとも諦めているのか友達
と談笑している者の2組に別れていた。

そんな中、3人は自分たちの席へと向かう。席は、離れているため
一度別れる。

魁斗は、自分の席へ向かいながら擦れ違うクラスのメンバーに挨拶
をする。席へ着くと、魁斗は持っていたカバンを机の上に置き椅子
に座る。

カバンに入っている教科書やノートを机の中に入れようと、カバン

から取り出していく。教科書やノートを全部取り出し終わると、軽くなったカバンを机の横に掛けて始業開始まで静香に教えようと思いい、魁斗は椅子から立ち上がった。

結局、魁斗と一緒に教えようと来ていた啓太が殆ど教えていた為、出番はあまりなかった。逆に、勘違いしていた部分が分かり静香と一緒に啓太に感謝していたぐらいだ。そんな中、チャイムがなり教室に一限目の教科担当の先生が入ってくる。

その先生に促され、魁斗は自分の席へと戻っていく。戻っていく中ふと、俺たちもう直ぐ3年だ。出来れば、啓太、静香と絡むのは結構楽しいし離れたくない。3年も同じクラスになれたら良いなと思いつつ魁斗は、自分の席に着いた。

☆ ☆ ☆

華蓮は、今東京にある『JOF東京本部』の会議室の中にいた。会議室は、U字の机が中央に置かれ、スクリーンが前にある。

あれから、最高速度で日本にやってきて、ターゲットの顔や状況を知るために此処にやってきていた。

だが、急いでやってきた華蓮の対応が間違っているかの様に2時間ほどこの会議室に一人で華蓮は座っていた。

流石に、もう我慢の限界だ。華蓮は、立ち上がりどうなっているのか誰かに問い詰めようと扉のある入り口へと向かう。

「だいぶ待たせてしまい、すまない」

華蓮が、部屋の中ほどまでに足を進めていると突然扉が開き、そう謝りながら男性が入ってきた。

男性は、40代ぐらいに見え黒いスーツを着ている。所々、白髪が混ざり始めている髪に、忙しかったためか少し顔がやつれていた。

そんな男性の姿に、問い詰めようとしていた気が削がれた華蓮は黙って近くにあった椅子に腰掛ける。

「これが、今回の資料だ」

近づいてきた男性は、そう言い華蓮の目の前に持っていた紙の束を置いて、自分は華蓮の向かいにある椅子まで歩きそこに座る。

華蓮は、資料に目を通してしていると部屋の電気が消されスクリーンが表示される。そこには、資料に載っている事が表示されていた。

「私は、亀井慎介。宜しく」

そう自己紹介をした亀井は、直ぐに手元の資料に視線を移す。

「そこにある顔写真が、墮ちた悪魔^{エクソシスト}祓い阪井将人だ。そして――」

亀井の進行に従い、華蓮は渡された資料に目を通していく。一枚目には、阪井将人の顔写真に、簡単なプロフィールが載っている。阪井将人は、切り揃えられた髪にメガネを掛けており何処か神経質な雰囲気漂わせていた。

ざっと、プロフィールに目を通した華蓮は二枚目を捲る。二枚目から十枚目までが、これまで阪井将人が任務の際に行ってきた行動が示されていた。簡単に目を通してみると阪井将人は、情報収集、交通制限、人払い、接触、撃破という流れを必ず通っている。

やはり、華蓮が感じた通り神経質みたいだ。自分の中の流れに沿う様に行動している。その流れに沿わなければ、悪魔と一度接触していようとも見逃していると記載されているのを時々見かける。その為、出さなくても済んだ被害が出てしまっていた。

その阪井将人のやり方について、組織の者と言いつ争う事が多々あったそうだ。そして、華蓮も阪井将人に憤りを感じる。人の命を何だ

と思っているのか。そんなに、自分の流れというものが人の命より大事だというのか。

華蓮はその阪井将人の理解できない行動に怒りを感じながら、十一枚目を捲る。十一枚目には、堕ちた阪井将人が取るであろうと予測される行動が記載されていた。

1. 王の魂が封印されている人間の搜索

2. 入り口の封印解除

この2つが載っていた。

華蓮は、その行動予測に記載されている内容を見てやはりと思った。力のある悪魔たちは、遠い昔に起きたとされる聖戦の時に人間に封印された、8体の王と呼ばれた悪魔の封印を解こうと行動している。残念ながら、封印された魂を持つ人間は組織の人間でも把握していない。把握しようと、頑張っているらしいが成果は上がっていない。そして、入り口の封印解除は悪魔が存在する世界へ通ずる扉がある地と云われている。その封印の地については常時、悪魔祓いが監視している。

華蓮は、資料を見終わると亀井に視線を移し阪井将人の居場所を聞こうと問いかける。

「兵庫に入ったと情報を受けたが、それ以降の動きが掴めていない」

それを聞き華蓮は、情けない何という体たらくと呆れてしまった。いや、それとも阪井将人の行動が凄いのかも知れないと考え直した。まあどちらにせよ、日本の組織の人間は情けない事に変わりはないのかも知れないが。

「分かったわ。まずは、私も兵庫に向かいます」

華蓮は、そう言い椅子から立ち上がる。そして、資料をそのまま机の上に置き扉へと向かった。

「そうそう亀井さん。一つ忠告が……」

華蓮は、扉に手を掛けながら振り向きもせずに亀井に告げる。

「私が待っていた2時間の間に、どれだけの人が悪魔によって殺されたかしらね」

亀井に告げると、華蓮は扉を開きそのまま会議室を去った。その華蓮の一言に、亀井は顔を俯け歯を噛み締める。

「分かっているさ……！ こちらの苦労も知らないで！」

第2話（後書き）

第1話の後書きで、不定期更新と書きましたがごめんなさい。基本1日か2日に一回は更新します。更に、更新できそうならば1日に2回という風にやっっていくつもりです。

では、感想など待ってまゝす！

第3話

テスト前日の授業も無事に終わり、放課後になった。普段なら魁斗と啓太は、静香がテニス部に所属しているので、グラウンドまで喋りながら着いていく。

だが、テスト前という事で一週間前から全部活動は休みとなっていた。なので、放課後となった今、明日から始まるテストのために殆どの人間が家に直行。もしくは、友達の家に行って一緒に勉強しようとして教室を出て行く。

魁斗もその例に漏れず、啓太と静香と一緒にテストの最終チェックを行おうと思って席から立ち上がると、静香の席のある方へと歩き出す。

「それじゃあ、い——」

「はいはいっ！ 明日の英気を養うため今日は遊びますっ！」

静香の席へ着いた魁斗が、「いつも通り、静香の家で勉強するか」と啓太と静香に言おうとしたら、静香に遮られてしまった。言葉を遮られた魁斗は、その言われた内容に、「はっ？」と思わず言葉を吐いてしまう。

啓太も静香の言った言葉に、言うと思ったという風にため息を吐くと魁斗を見て、諦めろと言うかの様に首を横に振る。

そんな啓太を魁斗は見つつも、それでも静香の事を思っ言う。

「おまえなあ、明日からテストなんだから最後まで勉強するべきだろ？ それに、遊んでる余裕なんてないだろ、成績ギリギリなんだから……」

自分の成績のやばさを、魁斗の言葉で思い出したのか静香は、言葉

を詰まらせて呻く。しかし、直ぐに気を取り直したのか頭を横に振るとビシッ！と効果音がしそうな勢いで魁斗を指差す。

「違うぞ、魁斗！確かに成績はヤバイかも知んない。だからと言って、勉強のし過ぎは逆効果だよ！適度の息抜きは必要な事なの！だから今日は、明日からのテストを全力で向かえるために遊ぶのよ！わかった!？」

そう力強く言う静香を見て魁斗は、もうどうなっても俺しらねえぞと思いつながらため息を吐き、静香の説得を諦めた。

その魁斗の諦めた様子を見た静香は遊べる嬉しさからか、うんうんと笑顔を浮かべながら頷いていた。

「それじゃ、まずはゲーセンへGO！」

そう言った静香は、机の上にあったカバンを引っ手繰るように持つと魁斗たちを振り返ることなく教室を出て行く。その様子を見ながら、啓太は諦めた方が楽だぞと言う様に魁斗の肩を叩く。そして、そのまま静香を追いかけるように教室を離れていく。

魁斗は、啓太が離れていく時に由香里ちゃんも誘ってやれよという言葉聞いて、そうだな俺たちだけで楽しむのかもしれないポケットの忍ばせていた携帯電話を開き、由香里にメールをする。由香里の返事を待たずに、魁斗も啓太たちを追い掛けて教室を出て行った。

魁斗たち3人は封紋高から南に30分ほど歩いて、ゲームセンターやカラオケなどのアミューズメントパークや、ハンバーガーショップや牛丼店などの飲食店、書店などが建ち並ぶ区画にやってきた。

それから、啓太に言われて誘った由香里だが残念ながら同級生とテ

スト勉強するからと返事がやって来ていたので、この場にはいない。そして、その返事の文末に何か可愛いもの取ってきてね！ とプレゼントを催促されてしまった。

魁斗は、その文末を見て勉強を頑張る由香里の為だし仕方ないかと思いいゲーセンのUFOキャッチャーで何か取ろうと決めた。

そして、静香の予告通り今はゲームセンターへと3人はやってきていた。

まずゲームセンターでは、有名な曲でダンスを踊って楽しむゲーム、有名な格闘ゲームで啓太と対戦して白熱したり、2on2のロボット物のゲームをしたりして魁斗もかなり楽しんでた。

「あ！ 魁斗、あれ可愛い！ あれ取って！」

だいぶ楽しんで、そろそろ次行こうかとゲームセンターを離れようと出口に向かって歩いていると突然、静香が叫んだ。

指名された魁斗は静香が可愛いと指を指しながら叫ぶ方を見る。その指差す方にはUFOキャッチャーが置かれていた。そのUFOキャッチャーを見て魁斗は、由香里に可愛いものを取ってきてねと頼まれていたのを忘れていた事を、少し内心焦りつつも静香が可愛いと叫ぶぬいぐるみを見る。

それは、緑色をした丸い物体で中心より少し上ぐらいに目？ だろるか大きな目の様な物が付いておりその上には、黄色で角みたいなのが2本生えている。目みたいな下には、口を模しているのか丸くて赤い物が付いておりそこから蛇の舌の形をした赤い物が伸びている。更に、口の左右に1本ずつ下には2本、角と同じ色をした丸い物が付いていた。

静香は、そんな緑色のよく分からない物体を可愛いと言っている。

魁斗は、それを見ながら可愛いのか？ 疑問に思い見続ける。

可愛いのか？ あれが可愛いのか？ と見続けていると、魁斗は何

だが可愛らしく見えてきて、あゝあれで良いかと由香里のプレゼントを決めた。

魁斗は、静香に何を言っても無駄なんだろうなと思い何も言わずに UFO キャッチャーにお金を入れる。

そこ！　そこ！　などと啓太と静香から指示を受けつつも UFO キャッチャーをプレイしていく。何度か失敗しつつも、何とか一個ゲットする。

取り出し口に落ちたそれを、静香は大事なものを扱うような慎重な手を取り出し、両腕で大事そうに抱え込む。

「魁斗、ありがとね！」

そう言って静香は、笑顔を浮かべる。その静香が浮かべた笑顔に魁斗は、ドキツとしながらも「お、おう！」と返す。

そして、あの笑顔が見れたし取って良かったかもなど魁斗は思いつつも由香里の分も取らないといけないと思い出し、もう一度 UFO キャッチャーに向き合う。

それを見た静香が、疑問の声を魁斗に投げかける。

「あれ、魁斗。　自分のも取るの？」

「いや、由香里に可愛いもの取ってきてって頼まれたんだ」

魁斗は、静香にそう返事をしつつも既に UFO キャッチャーに集中していた。そして、今度は啓太の指示する声しか聞こえないがそれに疑問を覚える事もなく失敗を繰り返す。

静香の分と合わせて、12回目……はず。啓太のそこという指示に従いつつも機械を動かしていく。2回目のボタンも押し終え、後は見守るだけになり魁斗は緊張しつつも成り行きを見守る。

機械のハサミ？　の部分が下がっていきぬいぐるみを掴もうと一度

開き、閉じようとする。

その光景を、魁斗はどうだ？ と見つめる。ハサミの部分はぬいぐるみを掴んでいるように見せながら上がろうと動き出す。

ハサミは、ぬいぐるみを2つ持ち、上がっている。上がり切るまでは、油断できない。上がり切った時の振動でぬいぐるみが落ちる可能性がまだ残っているからだ。

ハサミが完全に上がり切る。少しぬいぐるみが揺れる。しかし、ぬいぐるみは上手く噛み合わさっているのか落ちる事無く取り出し口へと無事落とされた。

2つのぬいぐるみが落ちるのを魁斗は見て漸く取れたと安堵しガッツポーズをさり気無くだが取る。

ぬいぐるみを取り出そうと、少し屈み手を伸ばす。すると、横から静香がぬいぐるみ一つ取り出していった。魁斗は、その静香の行動に首を傾げながら残り一つを取り出し口に残したまま、屈んだ体を元に戻す。

「はい、これ魁斗にあげる」

「えっ？ あ、ああ」

静香に、ぬいぐるみを渡される。渡されたぬいぐるみを受け取りながら、魁斗は静香の行動の意味が分からない。

あげるって言っているが、これ俺が取ったんだし。そう思いつつも、魁斗は受け取ったぬいぐるみを見る。しかし、取った状態のぬいぐるみにしか魁斗には見えなかった。ますます、静香の行動に混乱しそうになりながら静香を見る。

すると、静香は魁斗にぬいぐるみを渡して満足したのか後ろを向いていた。どういうことだ？ と啓太なら何か知っているかとも思いうる。啓太を見る。

だが、啓太からは手の平を上に向け、首を傾げるという事しか返ってこなかった。魁斗は、もういいやと答えを見つけるのを諦め取り

出し口に残ったぬいぐるみを取り出し、カバンの中に2体とも放り入れる。

あれから、魁斗たちはゲームセンターの次にカラオケに行って遊びまくった。そして、結局魁斗が家に帰ってきたのは23時頃になってしまった。

帰ってくると、母さんにテストの前日なんだからもう少し早く帰ってきなさいと怒られてしまったが、適当に受け答えして2階へ上がる。そして、取ってきたぬいぐるみを渡そうと由香里の部屋の前へやってくる。

「由香里、起きてるか？」

魁斗は、ノックをしながらそう扉に向かって聞いてみる。

「どうしたの、兄さん？」

「ほら、これ頼まれてた可愛いヤツ」

開いた扉から姿を見せた由香里に、カバンに手を突っ込みぬいぐるみを渡す。渡すと、魁斗はそそくさと自分の部屋へと戻っていく。

「可愛い……？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0558ba/>

王と呼ばれる者

2012年1月4日09時48分発行